齋藤茂吉と欧州留学 (2)

—ドイツ精神病学研究所—

小泉 博明

日本大学大学院総合社会情報研究科

Mokichi Saito in Europe (2)

—German Psychiatry Institute—

KOIZUMI Hiroaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Mokichi Saito (1882-1953) transferred from Vienna to Munich in July, 1923. There, through animal experimentation under Prof. Spiermeyer, Mokichi became fascinated with diseases of the brain, and gathered useful data within just a short time. After the Great Kanto Earthquake his stepfather Kiichi, who was experiencing problems managing the Aoyama Psychiatric Hospital in the quake's aftermath, requested Mokichi return to Japan. Mokichi bought a large quantity of books to use in research upon his return home and sent these ahead. Then he toured Europe to meet and share ideas with many psychiatrists. However, during his return voyage to Japan, Mokichi received word that Aoyama Psychiatric Hospital and his newly arrived books had been reduced to ashes. He went on to rebuild the hospital. In this paper, I focus on Mokichi's time in Munich.

1. はじめに

齋藤茂吉は、1923（大正12）年7月19日ウィーンから、ドイツのミュンヘンへ転学した。ミュンヘンには、恩師呉秀三が精神病学の体系を学んだクレペリン（E.Kraepelin）や神経細胞染色法を学んだニッスル（F.Nissl）の跡を継ぐ、シュピールマイエルがいる憧れの場所であった。茂吉は「一代の偉人クレペリンが願容に接して、東海の国から遙々来った遊子の空虚な心を充たさうとする熱心さもあったのである。」¹と言い、呉秀三の学風を慕い、その学問的足跡をたどりたかったのである。留学当初は、ミュンヘンの事情を探り断念していたが、ようやく実現することとなった。ウィーン大学の指導教授マルブクとの確執も遠因のようだが、「為事」は一応の成果を得ていた。前年1922年8月に、シュピールマイエル（Spiermeyer）を訪問した時には、転学の打診もしていた。

シュピールマイエルの教室は、ドイツ精神医学研究所神経病理部に当たり、神経病理組織学の初歩で

ある染色法から、茂吉は練習させられた。

初学者のごとき形にたちもどりニッスル染色法をはじめつ

この教室に外国人研究生五人居りわれよりも皆初学のごとし

（『遍歴』大正12年「ミュンヘン漫吟 其一」）

茂吉にすればニッスル染色法の技法については、巣鴨病院時代に既に修得していたので不満が残った。まして「為事」の完成を目前にする足踏みであったが、初歩からひたむきに練習したのであった。

2. シュピールマイエル教授

8月14日には、シュピールマイエルが、茂吉に研究テーマを与えた。組織学のテーマで、人間の小脳に障礙変化のある数例の材料から、諸課題を追尋する研究であった。

「小脳の発育制止」の問題を吾に与へておほどかにいます

（『遍歴』大正12年「ミュンヘン漫吟 其一」）

茂吉は、夏休みを返上して研究に打ち込んだ。その後、実父伝右衛門の訃報、続いて関東大震災のことなど、かなり茂吉にとって、神経衰弱な時期であったが研究を継続した。しかし、12月21日に、その途中で放棄せざる結果となった。

小脳の今までの検索を放棄せよと教授は単純に
吾にいひたる (『遍歴』同上)

そして、12月23日には、次のようにうたう。

業房の難渋をまた繰返しくらがりに来て心を静
む (同上)

茂吉は、この時の経緯を次のように記す。

私は十二月になるまで、数多の標本を作り、文献を抄記し、標本の所見を摘記し、大体の結論を腹に極めて、教授の批判をあふいたのであった。(略)

教授は数日私のものを見てくれたが、さて云った。『長いあひだ、骨が折れたでせう。結構な研究だとおもひます。けれどもこれは今まとめずに、お国へお帰になって、もっと症例を多くして為あげた方がいいとおもひますがいかがでせう。』

『つまり、材料には沢山の問題を含んでみえますから、新発見が欲しいのです。それに、あなたはもう初学者ではありませんから、その自重も要りませう。』教授の傍に一しよに顕微鏡をのぞくのを止めて、この詞を聴いてみた私の顔色は多分変ったに相違なかった。

私は恐らく随分寂しい顔をしたこととおもふ。私はこの為事に約半ケ年を費やし、それも片手間の為事ではなかった。そのあひだ、故郷の大地震に遭遇し、私はしきりに帰国せんことを迫られてゐる。苦慮のすゑに私の此地に踏とどまったのは、この為事に掛かってからいまだ間も無いころであったからである。この為事を今棄てるのは惜しい。それに私は日本に帰って、業房に籠ってゐられる身分ではない。さうおもふと、私の心はひどく陰鬱になるのであった。教授は瞬間にあらはれた私の顔の寂しい表情を見てとったのであらう。『学者は時に大きな犠牲を払はねばなりません。わたしも嘗て Alzheimer 病の例を数ケ年の間検索したことがあります。

しかしその時、取りわけ新発見がありませんでしたから私は全部それを棄ててしまひました。』かう教授は云って、つと立って行つてしまつた。私はかうべを垂れて暫くそこに沈黙してゐたが、やうやく標本の類を片づけたのである。これは十二月二十一日のことである。』(「馬」)²

このように、茂吉はわが家の危急に直面したなかで、一気に為し遂げたかった研究であり、棄てがたい未練があった。しかしながら、1924(大正13)年1月2日に教授に新年の挨拶をし、1月5日には次のようにうたう。

小脳の研究問題もいさぎよく放棄することに心
さだめつ

(『遍歴』大正13年「ミュンヘン漫吟 其二」)

そこで、人間の小脳の病理学的研究を断念し、新しいテーマとして、教授から動物実験をすすめられ、直ちに着手したのであった。なお、当時ドイツの実験的研究の現状について、加藤淑子は次のように言う。

実験的研究は元来ドイツ医学の生命であった。しかし大戦後の経済的窮乏のために、ドイツの医学者はせいぜいラットかモルモットの動物実験を行ふくらゐで、臨床的研究に半ばやむを得ず従事し、研究費のかさむ動物実験は日本人その他の外国人留学生に任せて置かねばならなかった。

動物実験開始によって支出増加を余儀なくされたであろうが、ドイツ医学者が行ひ難かつた実験的研究にたづさはり、ドイツ人の助手等から羨望されることもあつたのではなからうか。但しドイツの経済もやがて快復したので、その後間もなくドイツ人にも動物実験は可能となり、動物を抱いていそいそと廊下を歩く光景が見られるやうになった。³

茂吉にとって、時間的制約の中で、着実に成果を挙げることが重要であつた。ドイツ人がラットかモルモットであるのに対し、茂吉は家兎や犬の脳の動物実験であつた。歌集『遍歴』をたどりながら、その後の研究経過を見ると、次のようになる。

1月8日には、新しい研究に着手した。

新しいテーマに入りて心きほひ二匹の兎たちま

ち手術す (同上)

1月18日には、
一匹の犬の頭蓋に穴あけし手術にわれは午前を
過ごす (同上)

1月31日には、
けふ第二の犬の頭蓋の手術をばつひに為したり
汗垂りながら (同上)

2月10日には、
実験の為事やうやくはかどれば楽しきときあり
て夜半に目ざむる
風気味のことは屢ありしかど熱に臥しこと一日
もあらず (同上)

このように「為事」が順調に進捗した。3月26日
には、
兎らの脳の所見と経過とを書きはじめたり春雨
ききつつ
たどたどしき独逸文にて記しゆく深秘なるべき
鏡見像を (同上)

4月1日には、
この為事いそがねばならず日もすがら夜を継ぎ
て運び来りしかども (同上)

そして、4月26日には、
十六例の兎の所見を書き了へてさもあらばあれ
けふはやく寝む
(『遍歴』大正13年「ドナウ源流行」)

5月1日には、シュピールマイエル教授が、標本
と文章を見て、顕微鏡写真を撮り始めた。
わが書きし独逸文を教授一読し文献補充のこ
とに及べり (同上)

そして、5月5日には、
文献は電文のごとき体裁に書いてもよしと教授
いひたり (同上)

5月18日には、
結論を付けねばならずとおそくまで尚し起き
ぬる夜はつづきぬ (同上)

5月20日午前1時には、結論の一部を書き終たが、
茂吉の身体に異変が生じた。短期間での論文作成は、
茂吉の身体を酷使したのである。
朝々に少しづつ血痰いでしかどしばらく秘めて
おかむとおもふ (同上)

この血痰の症例は、欧州留学中において、これが

始めてではなかった。茂吉は、留学前の長崎医学専
門学校時代には、インフルエンザ(スペイン風邪)
罹り、その後に、喀血し血痰が続いた。それは「手
帳」に克明に記されている。また、尿蛋白も出てい
た。茂吉は、留学中の健康が懸念されるにもかかわ
らず、欧州留学を敢行したのであった。短期間に研
究成果をあげる事は、かなりの肉体的、精神的な苦
痛があったと思われる。まさに誰にも言わないで「秘
めておかむ」という哀切な表現が、茂吉の複雑な胸
中を吐露したのであった。

1923(大正12)年4月28日付、平福百穂宛の書
簡では、「僕は神明の御加護によって教室は一日も休
まず勉強しました。たゞ昨年の十月に中央墓地を散
歩して、翌朝から血痰が出ました。丁度長崎にみた
時のやうでした

(略)今でも少し勉強しすぎると出ます。しかし是
は心配ないときめましたから御安心願います。」⁴とい
う。これはウィーンの中央墓地を散策した時に、血
痰が出たということである。茂吉は留学中に、時々
ではあるが血痰が出たのである。この血痰の症候を
「心配はない」と自己決定したが、不安を抱きなが
らも、長崎での経験から、自らに納得させるように、
「心配はない」と言ったのであろう。また、治療や
療養する余裕もまったくなかった。

そして、5月30日には、

教授よりわが結論の賛同を得たるけふしも緑さ
やけし (同上)

このように、シュピールマイエル教授の賛同を得
て、茂吉はミュンヘンにおいても論文を完成させた。
1月8日に実験を着手し、何と5ヶ月足らずで仕上
げたのであった。留学中は、日々貴重な時間である
が、途中でテーマを変更するまでの、始めの4ヶ月
の無駄な時間をどうにか挽回できたのであった。

茂吉は「今年一月、新しいテーマによって為事
をはじめ、脳血管分布の状態と、血流停止による脳実
質の変化及びその代償機転の実験的組織学研究をす
すめていたのを、兎も角きょう書き了えたのであ
る。」⁵という。論文題目は「家兎の脳皮質におけ
る壊死、軟化および組織化についての実験的研究」
である。内村祐之は「科学者としての茂吉」で、「こ
れは純粋な脳病理学的研究であって、精神医学の臨

床と直接の関係はすこしもない。しかしちょうどこのころ勃興しつつあった脳の血行障害の研究に一役を買ったものであり、しかも普通に行われていなかったむつかしい染色技術を用いているため、今日読んでみてもなかなか教えられるところが多い。」⁶という。さらに、ウィーンでの仕事と比較して、「ウィーンの仕事はすでに解決に近づいている問題であるに対し、ミュンヘンのそれはこれからという問題である。それだけにテーマの内容と新鮮味という点で、私には後者の方がおもしろい。この仕事は家兎の軟脳膜を実験的に剥ぎ、その結果おこる大脳皮質の血行障害による破壊と修復の様子を、日を追うて検索したもので、十六匹の動物を用いて、手術後二十四時間から二十日に至る各時期を追求している。(略)この論文は顕微鏡写真十八図をふくみ、三十二頁にわたる堂々たるものである。(略)簡潔で手ぎわよくまとめられたすぐれた研究である。」⁷と評している。シュピールマイエル教授の指導は、最初の研究を途中で放棄させ、組織学的実験の日々を重ねるだけであり、茂吉にとって不満の残るものであった。しかし、茂吉のミュンヘンでの「為事」は、このように成果をあげたのである。

そして、10月24日には、東京帝国大学医科大学から医学博士の学位をうけた。主論文は「麻痺性癡呆者の脳カルテ」で、副論文はエルコグラムの二論文とウィーンでの論文であった。結果的には、ウィーンで論文を完成し、ミュンヘンでの成果がなくとも、学位論文が出来上がっていたこととなる。しかし、なおミュンヘンへ転学し、研究を続行したのは、帰国後の自らの医者としての進路を考えたことによる。養父紀一の経営する青山脳病院の後継者は、茂吉が二十歳の時に誕生した長男の西洋になるであろう。そこで、茂吉は、研究に専念する道を選ぶことも視野に入れたと思われる。そして、大量の医学書を買集め、日本へ送っていた。

医学の書あまた買求め淡き淡き予感はずねに人に語らず (『遍歴』大正13年「欧羅巴の旅」)

この歌から、「淡き淡き予感」とは謙虚であるが、帰国後の研究生生活への秘めたる自信をのぞかせた思いを感ずるのである。

3. クレペリンとの出会い

茂吉にとって、呉秀三が学んだ、クレペリンは畏敬と憧憬の学者であった。しかし、その出会いは予期せぬものであった。茂吉は、「エミール・クレペリン」で、その出会いを回想している。1923(大正12)年10月11日、茂吉はハンブルク大学の講師プチに、講堂で行われる活動写真に誘われた。活動写真とは、精神病者の行動を写したものである。そこに、クレペリン先生も来るということであった。茂吉はクレペリンという名前を聞き、「これは稍誇張していへば、渴仰仏のまへに額づかんとする衆生の心に相通ふやうなものだとも謂ひ得るであらうか。」⁸と心怦が高ぶった。活動写真を始める前に、次のような光景があった。

ハンブルクから来たプチがつかつかと降りて行って老翁の前に立った。そして叮嚀に握手をしてしばらく何か話をしてゐた。そこにカアンが二人の若者を連れて来た。(略)彼等はジャワ国から来た医者で、今日教室を参観したいといふのであった。(略)クレペリンは直ぐ彼等と握手をした。

その時プチが私に、『一つ紹介してあげるから来たまへ』といふから一しょにクレペリンの傍に行き、私みずから極めて丁寧に名告って、今この教室の顕微鏡室で為事をしてゐることを云ひながら私の名刺を渡した。クレペリンはそれを受取ったが名刺の文字を読もうとはしない。そして一言も私に向かって言葉を発しない。⁹

カアンとはこの病院の医長である。その後、すぐに活動写真が始まった。映写が終わり、講堂が明るくなった。茂吉は再度、握手を試みた。

私は立ってクレペリンの前に礼を述べた。クレペリンはそれに向って一語も応へない。私に次いでプチが立ってクレペリンに礼を述べた。すると意外にもクレペリンはいきなり自分から手を出してプチと握手した。これは私の予感さへ抱かなかったことである。それで意外なのである。クレペリンの握手が未だ終わらざる一瞬に私もクレペリンと握手しようと決心した。そしてまさに私が手を出しかけたその一瞬にクレペリンはプチと握手してしまった手をばひよいと

引込めて降りて行った。これも私の予期せざることであったから、やはり意外と謂はうとおもふ。私は一瞬と書いたが、実にそのとおりであって、クレペリンの行動は私にそれ以上事を為す余裕は毫末も與へなかつたのである。見てみるとクレペリンは二人のジャワ国の医者とも銘々握手して、そして講堂を出て行ってしまった。¹⁰

茂吉にとって、茫然自失とした衝撃の場面であり、消し去ることのできない心の痛手となった。あれほど憧憬していたクレペリンの予期せぬ態度に、講堂を出て「ひとりで苦笑してみた」とは言いながら、憎悪へと変容していったのである。茂吉は、その後クレペリンに対し愛憎並存（アンビヴァレンス）となった。そして、執拗なまでに、クレペリンに執着するのであった。その後、学会でクレペリンを見かけたが、クレペリンと目があうと、クレペリンは目をそらしたが、茂吉はクレペリンを凝視し、目礼などしなかつたという。

さらに、茂吉はクレペリンについて、「一代の碩学エミール・クレペリンは同時に最も敬虔なる禁酒実行者で、そして最も勇猛なる禁酒論者である。」¹¹ために、『飲まず屋の先生様』とか、『ラムネ党』とか、『実に偉い精神科の主任様が』などと学生から揶揄されていて、茂吉は内心喜んでいた。そのような経緯があり、次の歌がある。

愛敬の相のとぼしき老碩学 Emil Kraepelin をわれは今日見つ

われ専門に入りてよりこの老学者に憧憬持ちし
ことがありにき

（『遍歴』大正12年「ミュンヘン漫吟 其一」）

この歌には、茂吉の憤怒が込められている。茂吉の次男宗吉（北杜夫）は、次のようにいう。

クレペリンの「無礼さ」について昂奮した口調でしゃべるのを、中学時代から晩年の箱根の勉強小屋の二人暮しのときまで、私は幾度聞かされたことか。とにかく父は、「うぬれ、この毛唐め！」と心の中で歯ぎしりしたのである。「毛唐」という言葉は随筆には出てこない。¹²

このようなクレペリンの態度については、西丸四方は「日本はドイツからいろいろ教えを受けたのに

米英側についてドイツに宣戦を布告した、弟子の分際で師に楯ついたけしからぬ国であると思って、斎藤に出す手も躊躇されたのであろう。（略）異国の若い留学生が自分の講義を聞いて挨拶に来たところで、いちいち遠方からご苦労と握手することもあるまいと考えたのだらう。ジャワの留学生に握手したのは、クレペリンは前にジャワへ行って比較文化精神医学の端緒を開いたので、ジャワ人に親しみを持っていたからであらう。」¹³とクレペリンを精神分析している。

この対応に対して茂吉は、クレペリンの愛国心の発露と片づけられなかつたのである。医者として、その前に人間としてクレペリンの品格を問題視したのであり、何よりも茂吉自らの自尊心が損なわれたのであった。茂吉は、ウィーンのオーベルシュタイネルを殿上人に喩えれば、クレペリンは野武士の風貌であるといった。仮に、クレペリンと握手をしていたならば、茂吉にとって、クレペリンは畏敬と憧憬を超越した存在になっていたであらう。

このような茂吉の性格は、意見の分かれる所であらう。この執拗なまでの執着が、茂吉の学問的研究成果を完遂させたエネルギーとも言えよう。人間茂吉は完璧ではない。また、それを求めてはならない。ただ言えることは、後に臨床医として茂吉は病者に対して、耐えがたきを耐え、憤怒の情を押さえ、病者に接していたということである。

4. ミュンヘンでの生活

茂吉は1923（大正12）年7月19日にミュンヘンに到着以来、自らの住居が不定であつた。それは、部屋を決定しかけては、南京虫（トコジラミ）に來襲されるからである。どうも茂吉の体臭が南京虫に好かれるのである。詳しくは『南京蟲日記』¹⁴に譲ることにするが、何と1か月半もの間、南京虫の出ない部屋探しに執着していたのである。また、ダニやシラミへの憎悪と憤怒は、茂吉を語るに面目躍如と言えらるであらう。

また、茂吉は「為事」の完成に向け精進していたが、茂吉にとって、さらに艱難な事件が連続した。まず、同年8月29日には実父の守屋伝右衛門の訃報である。続いて、同年9月1日に起こった関東大震

災による青山脳病院の被害であり、その結果、財政が逼迫したことによる、養父紀一からの帰国命令であった。制御不能な力により、茂吉は苦悩と煩悶に苛まれ、それを超克する試練でもあった。

関東大震災の情報を得た茂吉にとって、家族の安否が懸念された。茂吉の『日本大地震』には、不確かな情報に翻弄される茂吉の状況が記されている。茂吉は、1923年9月3日、シュバーテンブロイ食堂で、一人寂しく夕餐をとり、麦酒を傾けていた。2杯目の麦酒を取り寄せ夕刊を読んで、日本震災の記事を目にした。

新聞の報告は皆殆ど同一であった。上海電報に據ると、地震は九月一日の早朝に起り、東京横浜の住民は十万人死んだ。東京の砲兵工廠は空中に舞上り、数千の職工が死んだ。熱海・伊東の町は全くなかった。富士山の頂が飛び、大島は海中に没した。云々である。¹⁵

息をつめて、新聞を読んだ、茂吉にすれば、現実の出来事のような気がしなかった。すぐに、間借りしていた家に帰り、再び新聞を読むと、家族の安否が気になり、動揺した。その後、不安で何事にも手がつかず、「為事」があったにもかかわらず、教室へも行く気になれず、夜は眠れず、家族の夢を視た。「私は或時には、東京の家族も友人も皆駄目だと観念したこともある。」¹⁶という。ようやく、9月13日の夕方になって、家族が無事であるとの電報が茂吉に届いた。

伯林の M 君から電報が届いた。電報は、
Folgendes Telegramm aus Japan erhalten “your family friends safe”=Maeda としてある。¹⁷

中村憲吉がベルリン大使館に打った電報が、ベルリン在住の前田茂三郎から伝えられ安堵するのであった。

同日の「西村資治日記」によれば、次のようにある。西村はミュンヘン工科大学に実業練習生として留学し、茂吉と交遊があった。毎日のように行動をともにしていた。

斎藤さんが日本の新聞を持って来たが、それに歌人、斎藤茂吉の事が一寸出て、医学士とあるから斎藤さんになんの気なく聞いたならそれは「おれ」の事だと云ふので驚く、斎藤茂吉と云

へば歌人として以前から聞いた名であるが、それが眼前に居る斎藤さんとは思はなかった。時々何か深く考へて居るので不思議に思ったが一寸歌人とは受けとれなかった。¹⁸

ウィーンでは、歌人としての茂吉を教授も知っていたが、ミュンヘンの教授は誰も知らなかった。友人の西村も驚いたのであった。かくの如くに、日本からの一人の研究者として、茂吉は日々研鑽していたのである。

9月24日付、中村憲吉宛の書簡には、

「いろいろ心を使ったので目下神経衰弱にかゝり居る。それでも教室へ行って勉強してゐる。」¹⁹とある。

10月14日付、前田茂三郎宛の書簡には、

「小生、教室がよひ初め候ため又々平凡たる生活に入り申し候」²⁰とあり、ようやく落ち着いたようである。

さて、青山脳病院は、養父紀一好みのローマ式建築で、威容を誇る総煉瓦建築であったが、関東大震災では、次のような被災状況であった。

10月25日付、前田茂三郎宛の書簡では、

青山脳病院は煉瓦造の本館等をはじめ大損害にて、それに入院料等全部支払なく、長屋なども半年分無賃にして呉等、目下、患者身寄の者、病院におしかけ居り、たゞで食はせてゐるよし、物品欠乏し、全体が、いも、菜等の半分も入りたる飯をくひ居る由に候、(略)青山病院の煉瓦塀の写真等をおくり呉れ候が、見ると、塀が途中から二つにおれて、倒れ、煉瓦がめっちゃめっちゃになり居り、如何に劇しかりしかも想像以上に御座候。²¹

11月2日付、前田宛の書簡では、

何でも病院の本館、煉瓦が亀裂して使用し難く、丸柱の人造石(心が木に候)がむけて、化の皮が表れ候よしに候。それでも、あの柱が若し煉瓦でもつみあげてみたならば本館諸共倒れたところに候ひき。患者等は、誤(ママ)楽室に雑居して、芋、菜の葉を入れたかて飯をくひ、露命をつなぎ居る由に御座候。今までたまりし入院料等は一切免除してもらひたいといひ、又長屋等もこゝ半年は免除してもらひたいといひ、そのほか入院患者の身内の者がどしどし避難し

て来て幾日もたゞで宿り居る等のことが書いてあり候。²²

と、紀一からの手紙の内容を書いている。震災後の病院の混乱と、被災者への救済が進捗しない状況が把握できる。また、病院が「安普請」の建築であったことが明らかとなった。

大震災の当日は青山脳病院に紀一は居らなかった。家族とともに箱根強羅の別荘にいていた。てる子だけが子供をつれて震災の前日に帰っていた。紀一と弟高橋四郎兵衛は丁度、帰京の途中小田原駅で難にあい、三日三晩かかってやっとの思いで病院へたどりついたのであった。てる子は病院の職員を指揮して、被害の応急措置と食糧の確保に当り、見事に病院をまとめぬいたのである。²³

ここに、逆境にも耐える気丈な明治の女性、妻てる子の姿が見える。このような状況が、茂吉へ通信で伝えられ、明らかになり、留学の継続が困難であることを悟った。紀一からは、病院財政が許さぬから帰朝せよという書簡が届けられた。紀一にすれば、茂吉はウィーンで「麻痺性癡呆者カルテ」その他の論文を仕上げ居り、留学の目的は達せられたのであり、ミュンヘンでの生活は茂吉の道楽であるという解釈であろう。震災がなければ、茂吉には許容されることであった。

茂吉は窮境を悟り、終日にわたり逡巡した。紀一の書簡が届いた10月25日の夜の、前述の前田茂三郎宛の書簡では次のように言う。

今日は、小生も教室を休んで終日考へ候次第に御座候。そして兎に角、信用状の金のあるまで、ミュンヘンに止まるつもりでいたし、只今父上に手紙かきたる処に御座候。小生もアルバイト半ばにてかへるのは非常に悲しき事であり、二度と洋行は出来ない事ゆゑ、出来るだけ止まりたき心願にて、左様考へ候次第に候がなほ大兄の御意見も御きかせ下されたく願上候。(略) 東京の事を思うふと、もうアルバイトどころではなけれども、この事も小生の身にとりて、やはり一生の大事ゆゑ、アルバイトの中止することも残念だし、困りあるところに御座候²⁴

この書簡を受け取った前田から、茂吉は激励の返

書をもたらした。「十月二十九日(月曜)、伯林前田氏来書」として、次のようにうたう。

業房にとどまり居よといふ友の強きところに
涙いでむとす

(『遍歴』大正12年「ミュンヘン漫吟 其一」)

そして、11月2日付の前田茂三郎宛の書簡では、「為事」の継続を決意した。

拝啓、御手紙にてはげまして頂き、小生も当分とどまりアルバイトを続ける決心を致し申候。

それでも何だか落付きが悪く御座候。²⁵

さて、そうなれば留学費の金策をどうするか、思案を巡らした。紆余曲折があったが、結果的には平福百穂から金1千円を用立ててもらい、留学を継続することが可能となった。百穂の他にも、島木赤彦や中村憲吉へも金策を依頼した。また、別に親友で銀行家の渡辺幸造にも依頼している。

11月10日付、久保田俊彦(島木赤彦)宛の書簡では、次のようにいう。

西洋に居りて、唯一のたよりは金ゆゑ、準備金として是非是非大切なり。左橋甚五郎や護持院原のかたき打の九郎右衛門等の胴巻の中の金子のやうなものに御座候。²⁶

また、11月26日付け、中村憲吉宛の書簡では、次のようにいう。

動物実験や、印刷の写真版にはなかなか金がかかる。おやぢは実際さういふ事には同情が無いのだから、僕は、いよいよ困ったすゑに大兄らにすがって金を用意し、おやぢの面倒をあてにしまいと決心したのである。²⁷

そして、11月28日付、平福百穂宛の書簡では、茂吉は次のように窮状を訴えた。

青山のおやぢは、小生が伯林あたりで遊んでゐることと思つてゐるらしく候。二度も洋行せるおやぢなるが、やはり小生の心中は少しも分かり申さず。これは性格の差違からまゐり候。(略) 小生も製作力全く衰へ候へども、国へ帰り候はば何とか致したく存じ居り候。若いものには負けないやうにいたしたく存じ居り候。病院の方もせねばならず、医学士のアルバイトは不可能と存じ居り候。それゆゑ、何とかしてもう一つや二つやりたく存じ居り候。その心中は青山の

おやぢには分かり不申候。²⁸

1924 (大正 13) 年 2 月 23 日になり、平福百穂からミュンヘンの茂吉の下宿宛に、金 1 千円在中の書留郵便が送達された。茂吉は感涙にむせんだ。百穂は、歌友であり、日本画家として活躍しているのであるが、この援助は大きな負担であったのではないだろうか。まさに百穂の援助は、茂吉への人間性の信頼の証とも言えるのである。1 千円が、今のいくらかは断定できないが、明治 44 年に茂吉が東京府巢鴨病院医員となった月給が 20 円であった。これから推定すれば、1 千円の価値と有り難さが理解できよう。

5. 欧州遊学と帰国の途

茂吉の欧州留学は、医学の研究、とくに学位論文の製作が目的であり、ウィーンやミュンヘンでの生活は、業房での研究生活に没頭した。まさに、血痰が出るほどの労苦を重ねたのであった。茂吉の留学したオーストリア、ドイツの両国は、第一次世界大戦の敗戦国であり、窮乏、不安、動揺の時期であった。そして、激しいインフレーションが進行し、クローネやマルクの対外価値が暴落した。そのような中で、茂吉は、教室が休みの春、夏、冬には寸暇を惜しみ、旅に出掛け、見聞を広めた。これが、後に「ドナウ源流行」などの珠玉の滞欧随筆として残ることとなる。

1924 (大正 13) 年 6 月 5 日には、「為事」が仕上がったので、シュピールマイエル教授、プラウト教授の自宅に暇乞いし、翌日にはリューディン教授、イセルリン教授に挨拶した。

ミュンヘンの諸教授をけふ訪ねゆき別れ告げたり
り感恩とともに

(『遍歴』大正 13 年「ドナウ源流行」)

その後、7 月 22 日にミュンヘンから、翌朝パリへ着くまで、精力的に精神病学者に会い、精神病院を視察した。煩瑣になるが記すこととする。帰国後の、将来を意識してのことでもあろう。6 月 12 日には、ミュンヘン郊外の Eglfing 精神病院を参観した。

おおきな狂院に来て現にし身に泌むことのかずかずを

(『遍歴』大正 13 年「ガルミッシュ行」)

6 月 17 日には、チュービンゲン医科大学で、ガウプ主任教授、クレッチマー教授、ショルツ教授らに会う。クレッチマーは、ガウプ門下で、1921 年に『体格と性格』を著し、体型を肥満型、細長型、闘士型、混合型の四種に分け、精神病はそれぞれの特異体型と密接な関係があるとした。ショルツは、ガウプに師事した後、シュピールマイエルの神経病理学研究室へ移り、後任者となった。

小さなこの町に研鑽の学者等をたづぬる心き
よくもあるあか

(『遍歴』大正 13 年「独逸の旅」)

6 月 19 日から 21 日まで、滞在したハイデルベルクでは、ウィルマンズ教授に会う。

Wilnans 教授にあひてわが父が嘗て来しことを
おもひいでしも (同上)

6 月 25 日には、イエナでツァイス工場と精神病学教室を訪れた。ベルガー教授は、脳波の発見者として特に有名で、ツァイス社の後援により、脳電位を測定する器械を考案した。

教室にては教授 Berger 氏と講師 Jacobi 氏とが
われをもてなせり (同上)

6 月 28 日には、養父紀一が留学した、ハルレ医科大学精神病学教室を訪れた。

わが父が嘗てここにて学びしをおもひ偲びて語
りあひける

そのころの Hitzig 教授の写真をも見せてもらひ
ぬ髯の白きを

テオドール・チーエン先生もこの都市に哲学部
門を講じませり (同上)

ヒッチヒ教授は、大脳皮質の一定部位を電氣的に刺戟すると身体の一部の筋肉に収縮が起こることを発見した。また、チーエン教授は、精神病学者であったが、哲学史、認識論、心理学、時に美学を講じていた。

加藤淑子は、ドイツ精神病学の日本への移入を次のように整理する。

明治時代のドイツ系精神病学の日本移入はシュ
ーレ、クラフト・エーピング、チーエン、クレ
ペリンの順序であった。呉秀三の前任教授榊俣
は主にクラフト・エーピングの教科書に拠って
講じたが、呉秀三の留学中に精神病学を講じた

法医学教授片山国嘉はチーエンの精神病学に拠った。呉秀三の帰朝後はクレペリンの学説が風靡したので、チーエンの学説は明治三十五年九月刊「精神病学」で紹介されただけで、わが国への影響は少なかった。その各論は原因的分類によらず、臨床的経過による分類であり、証候通論においてチーエンの学説が発揮されたといはれ、チーエン学派はクレペリン学派と対した。

29

6月29日から7月6日まで滞在したベルリンでは、カイゼル・ヴィルヘルム脳研究所を訪ね、フォークト教授、ビルショウスキー教授に会った。フォークトは同学のセシル夫人と連名で、有髄神経繊維の分布に基づく大脳皮質構築の研究を行っていた。ビルショウスキーは、神経原繊維鍍銀法が有名であった。

ベルリンの研究所にて碩学の二人にあへば心みつるごと (同上)

7月7日には、ハンブルクの精神病学教室で、ワイガント教授、ヤコブ教授、カフカ教授に会った。ワイガントは、クレペリンの助手であった人であり、『精神病学図説・概要』(1902年刊)は、図版が多く日本の精神病学の初学者に愛読された。ヤコブはクレペリンやアルツハイマーに師事した。クロイツフェル・ヤコブ症にその名が残る。

同胞がここに為事せしゆゑにヤコブ教授はわれにも親し (同上)

これが、パリへ移るまでの、精神病学者への訪問である。ドイツ精神医学の碩学にも出会い、短期間に精神的に得るものも大きかったであろう。そして、7月23日にはパリへ到着し、オテル・アンテルナショナルで、妻てる子と落ち合った。

当初計画されていた、てる子の洋行は関東大震災により頓挫した。大正12年の10月25日付、前述の前田茂三郎宛の書簡では、次のようにいう。

愚妻の洋行も中止と相成り、愚妻より非常に落膽してまゐり候。或は、何とかして是非来たいともかいてあり候。何でも非常に亢奮してかいてあり候。只今、小生は、時日が経って、状態も少しく回復せば、又何とかならぬとも限らぬゆゑ、よく父上に願って見るやうに手紙かきたる處に御座候。³⁰

さらに、翌年の大正13年2月24日付、中村憲吉

宛の書簡には、次のようにいう。

愚妻の洋行催促は、あれは、自宅の方の事情の分からぬ前に出した手紙にて、船室もきまり、旅行免状もとった矢先に地震があったのでありしゆゑ、折角の用意に対し、気の毒に思ひしゆゑ、父の許可を願ふやうにいひやりたるものなり。その後、父より書面にて自宅の事情も分かりしゆゑ、洋行中止の手紙をも再三やりたり。なにしろ、手紙が四十日もかかるゆゑ、いろいろおもふやうにまゐらぬ事あり。小生は小生のために御尽力を御願したけれどもカカアの洋行費までは御願せざりなりしもカカア自身かん違ひしていろいろ御迷惑かけたるらしく、御かんべんねがふ。³¹

このように、妻てる子の洋行は中止せざる状況にあったが、気骨があり、父親譲りの進取の精神に富むだけに、周囲の反対を押し切り、自らの信念を貫き洋行を実行するのであった。とはいえ、斎藤家にとって、財政が非常に厳しい時であった。

茂吉とてる子との夫婦仲は、相思相愛とは言い難い所があったが、11月30日にマルセーユより、帰途につくまで、4か月間、てる子と同行し、パリ、ベルリン、チューリッヒなど欧州各地を精力的に巡検した。茂吉にすれば、てる子の洋行で、自らもパリ見学ができ、てる子の持参する金銭にも、秘かな期待があったことは否定できない。

9月23日には、チューリッヒ大学モナコフ教授に会う。脳解剖学者として著名である。

おとづれて Monakow 老先生の掌をにぎる我が掌は児童のごとし

(『遍歴』大正13年「欧羅巴の旅」)

11月20日には、パリのサンタンヌ精神病院を參觀し、クロード教授に会った。ここには、パリ大学の精神病学教室もある。この病院は、かつて恩師呉秀三が訪れた場所であり、サルペトリエール精神病院と共に古い伝統をもつ精神病院である。シャルコーは、近代神経学の祖であり、フロイトの師であり、ヒステリー研究で有名である。ブシャーは、Bourchardの綴りミスで、シャルコーの同僚であったと思われる。³²

古びたる伝統をもちて巴里なるこの狂院はおろ

そかならず

Bouchad, Charcot を経て当代の Claude 教授はいまだ老いずも

(『遍歴』大正 13 年「巴里雑歌 其二」)

11 月 21 日には、大学神経学教室を参観して、ギラン教授に面会した。パリ大学神経学教授で、ギラン・バレ症候群に名が残っている。

教授ギーランいまだ若くして巴里なる大学生らもきほひつつ見ゆ

この教室にピネルを描きし油絵をまのあたり見しことをよろこぶ (同上)

ピネルは、フランス革命期にサルペトリエール精神病院で、罪人同様に監禁されていた精神病患者を鉄鎖から解放した。巢鴨病院には、サルペトリエール精神病院に飾られていたピネルの絵の模写が掲げられている。茂吉は「サンタンヌとサルペトリエールとを一部分混同した」³³ ようである。

11 月 27 日には、マルセーユで、精神病院を見学した。

中苑にむかひてひらく建築のその色どりはものやはらかし

一時代過去のごとくにも思はゆるこの狂院に一日親しむ

躁暴はマルセーユにても同じにて狂者乾海草の中に居りけり

男室と女室をつなぐ寺院あり加持力教国の狂院なれば (同上)

亢奮する躁暴患者は、海草を積んである部屋へ入れ、保護したのであった。また、男室と女室の中央には、カトリック教会を配置していた。茂吉が、ヨーロッパの精神病院をうたった数は少ない。有名な大学教授に会うのに比較して、精神病院の見学は殆どない。これは、将来は研究者への「淡き予感」がそうさせたもので、精神病院をじっくりと見学し、病院経営について思いを巡らすことは無かったということである。

11 月 30 日、榛名丸に乗り、マルセーユを出港し、12 月 30 日に香港を出て、台湾海峡にかかった 31 日の午前 1 時、船中で平福百穂より青山脳病院全焼の電報を受け取った。1925 (大正 14) 年 1 月 5 日、神戸港到着、7 日に帰京した。

大正 14 年 1 月 1 日付、前田茂三郎宛の書簡では次のようにいう。

病院の財産は全部焼けました。小生のものも全部焼けました。ドイツ、オーストリーで買った書物も全部焼けました。(略) 運命は実に人力のいかんともすべからずです。どうか今年はいゝ年でありたいと思います。最終の大兄の御心づくしの本箱も焼けました。³⁴

また、次のようにうたう。

焼あとに掘り出す書はうつそみの屍のごとしわが目のもとに

(『ともしび』大正 14 年「きさらぎなかば」)

今後の静かな学究生活のために、ヨーロッパで苦勞して買い集め、故国へ送って置いた書物 (文献) が、すべて灰燼となった。青山脳病院の火事の状況は、1924 (大正 13) 年 12 月 30 日の『東京朝日新聞』の見出しは次のようにある。

「猛火に追はれて泣き叫ぶ狂へる男女 突然焦熱地獄を現出した 青山脳病院の火事」「焼死者二十名発見さる 公費患者十六名は生死共不明」「発火の原因前夜餅搗きに使った 石炭の不始末から」「焼死したのは婦人患者計り 恰度解約した許りで 保険は一文もなし」「慄へながらも泣わめく避難者 黄昏の青山南小学校庭に 一患者絶命す」また、「焼出された狂人」と「青山脳病院の焼け跡」の写真が掲載されている。そして、記事は次のようにいう。

二十九日午前零時半青山南町五の八四青山脳病院 (院長斎藤紀一氏) 賄所から発火忽ち火焰は崖下の新館附属舎を一舐にして更に二丈余の高地に建つ本館に延焼、広い院内は見る見る一面の火の海と化し焰と煙の中からは狂へる男女の患者が救ひを求める声物凄く宛然の焦熱地獄を現出した。(略) 本館、新館、附属舎其他十五棟三千余坪の建物を全焼した。

12 月 29 日午前 0 時 35 分に出火し、3 時 20 分には全焼した。自費 55 名、公費 250 名の患者のうち 20 名が焼死した。また、医者板坂周活、電気治療助手丸山鴻太郎も焼死した。救助された患者は他の五病院に収容された。病院は増築工事が完工間近で、火災の損害は 160 万円であった。火災保険は 11 月 15 日で失効していた。³⁵ 幸い、紀一が茂吉の帰朝に

備え、病院の塀の外に、二階建てを新築したのが、辛うじて焼け残った。茂吉は、この焼け残った家に茫然自失として帰り着いた。出火原因は、28日に患者や職員に正月に振る舞う恒例の餅つきが病院の炊事場で行われ、その残り火の不始末によるものであった。なお、その餅つきは、有力なタニマチの一人である紀一のために行う、出羽の海部屋の力士たちによる恒例の行事であった。³⁶

茂吉は、欧州留学中に研究に勤しみ、将来の計画を立てていた。青山脳病院の焼失は、茂吉の「淡き予感」をうち砕いたのであった。茂吉の心境は、次のようにうたう。

焼けあとにわれは立ちたり日は暮れていのりも
絶えし空しさのはて

(『ともしび』大正14年「焼あと」)

6. まとめ

茂吉は、1921(大正10)年からまる3年、ウィーン大学、ミュンヘン大学に留学し、念願の学位論文を完成し、研究の余暇には、欧州各地を巡歴し、帰国後に『遠遊』『遍歴』の二歌集と『滞欧隨筆』を残した。留学の目的は十分に達せられたと評価できる。しかし、帰国後には、青山脳病院の再建が待ち受けていた。院長である養父紀一はすでに65歳となり、政界進出でかなりの財産を浪費した後であった。紀一は、1917(大正6)年4月、総選挙(山形3区)で立憲政友会から当選したが、1920(大正9)年5月の総選挙では落選した。従って、青山脳病院再建という、重く困難な世俗的な役割が、運命の悪戯と言うべきか、茂吉の双肩にのしかかることとなった。静かな学究生活など、考える余裕すらなくなったのである。異郷で、関東大震災による青山脳病院の被災状況に動揺したが、その1年4か月後には、帰国目前に全焼とは、誰もが予測不可能であろう。まずは病院再建、そして院長就任へとその責務を担うことになるのであるが、留学中の茂吉は学位取得を第一義とし、ヨーロッパの精神病学の最新成果を体得することに腐心していた。よって、誰もが、すぐに院長となることは予期せぬことであった。結果として、もっと欧州で、臨床を経験し、病院経営についても学ぶべきであったのであろうが、それは結果として無いものねだりである。

欧州留学の目的を振り返って見ると、大正10年1月20日付、久保田俊彦(島木赤彦)宛の書簡の「茂吉は医学上の事が到々出来ずに死んだといはれるのが男として、それから専門家として残念でならぬ」という決意に集約されよう。そして、研鑽の結果は、研究者となる「淡き淡き予感」と秘かな自信を抱くようになった。そのために、留学中は儉約を重ね、膨大な書籍を購入し、その来るべき準備に当たった。書物は、脳病院と青山墓地の間の倉庫に保管され、留学中に送達したものは、箱のままであった。その倉庫は、焼け残っていたが、火災で温度が上昇し、自然発火点に達し、割れ目から空気が入り炎上した。しかも、消防車が引き上げた後のことであった。そして、『作歌四十年』では、「私は雨の降らぬ日は折があれば書物を掘っていた。自分の如き者にとって書物は唯一の品物であったが、こうして焼けている書物を見ると、ただ無生物のような気持がしないのである。」³⁷という。書物に親愛の情を覚え、焼け跡を棒切れで突き、焼け残り本を取りだし、一枚一枚焼けた部分を鋏で切り取り、丁寧に干して、一冊の本に綴じた。この行為は、書物への愛惜と言うより、執着であり、茂吉の粘着なる性格をあらわすに面目躍如である。そして、研究者へ途への未練が棄て難きということである。

しかし現実には、茂吉は自身の将来を構想する猶予を一毫も持つこともなく、運命のままに翻弄され、茂吉自らが耐え忍び、その困難な壁を乗り越ろうと疾走したのであった。そこには、留学中に臨床医としての経験をなかつたとはいえ、留学の経験そのものが茂吉の人間性を高め、逆境を振り払う精神を体得させたのであった。当時の新聞記事を見ると、精神病院を「狂院」、精神病者を「狂人」「狂へる男女」などと記している。このような時代精神のなかで、臨床医として、病院経営の院長としても、今後に病者との共生を展開するであろう、颯爽たる息吹を感じさせ、そこに向けての呻吟の時でもあった。

茂吉と妻てる子は、パリを起点に、4か月にわたり各地を訪ねた。この間に、てる子は妊娠し、翌年には長女百子が誕生した。平福百穂からとった名である。茂吉とてる子の夫婦間にとって、比較的安定していた時期ともいえよう。長男の茂太は、二人を

次のようにいう。

茂吉は何事にも「おそれおののく」心情を持った。輝子は何事にも「こわいもの知らず」だった。それは本来の性格と「育ち」による。³⁸

二人の性格を言い得て妙な、対比である。この相反する性格が、時には反発し合うが、てる子の存在が、この困難を耐えるに、人間茂吉を際立たせてもいたのである。

¹ 『斎藤茂吉全集』第5巻、岩波書店、1973年、332ページ

² 第5巻、868～870ページ。

³ 加藤淑子『斎藤茂吉と医学』みすず書房、1978年、111ページ。

⁴ 第33巻、530ページ。

⁵ 斎藤茂吉『作歌四十年』筑摩叢書、1971年、103～104ページ。

⁶ 「アララギ」斎藤茂吉追悼号、1953年10月号、45ページ。

⁷ 同上

⁸ 第5巻、333ページ。

⁹ 同巻、333～334ページ。

¹⁰ 同巻、335～336ページ。

¹¹ 同巻、338ページ。

¹² 北杜夫『壮年茂吉 「つゆじも」～「ともしび」時代』岩波現代文庫、2001年、125～126ページ。

¹³ 西丸四方『精神医学の古典を読む』みすず書房、1989年、212～213ページ。

¹⁴ 第5巻、784～795ページ。

¹⁵ 同巻、797ページ。

¹⁶ 同巻、800ページ。

¹⁷ 同巻、802ページ。

¹⁸ 藤岡武雄、新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』沖積社、1987年、215ページ。

¹⁹ 第33巻、546ページ。

²⁰ 同巻、548ページ。

²¹ 同巻、552ページ。

²² 同巻、553ページ。

²³ 藤岡武雄、前掲書、222ページ。

²⁴ 第33巻、552ページ。

²⁵ 同巻、553ページ。

²⁶ 同巻、558ページ。

²⁷ 同巻、570ページ。

²⁸ 同巻、571～572ページ。

²⁹ 加藤淑子、前掲書、129ページ。

³⁰ 第33巻、552ページ。

³¹ 同巻、585ページ。

³² 岡田靖雄『精神病医 斎藤茂吉の生涯』思文閣出版、2000年、237ページ参照。

³³ 同上、238ページ。

³⁴ 第33巻、625ページ。

³⁵ 斎藤茂太『茂吉の周辺』によれば、「青山脳病院の火災保険は、切れていたのではなくて、はじめから掛けていなかったのではあるまいか、父はそれを知らず、それを知っていた周りの者も父がこわくて言い出せず、切れたことにしていたのではあるまいか。(略) 紀一の性格からすれば充分考えられることではある。」とも指摘している。(中公文庫、1986年、108～109ページ。)

³⁶ 山形県村山郡中川村出身の出羽嶽 (佐藤文治郎) は、紀一の許で養われ、青山脳病院内の斎藤貞次郎の養子となり、後に出羽の海部屋に入門した。

³⁷ 斎藤茂吉『作歌四十年』前掲書、115ページ。

³⁸ 斎藤茂太『回想の父茂吉 母輝子』中央公論社、1993年、207ページ

(Received: September 30, 2009)

(Issued in internet Edition: November 1, 2009)